

巻頭言

第3の波にあらわれて

山中 千代衛*

Chiyoë YAMANAKA*

1987年の年頭にあたって、21世紀を展望する時、年賀のあいさつのおめでとうと言えらるか。世界のGNPの10%を支え、貿易黒字900億ドル、最大の債権国といわれる日本、これは果して実力なのか。世界中から日本に国際協調を求める大波がおしよせている。

戦争終了時、40年前の日本は悲慘の極にあった。都市という都市は全焼しており、工業力は壊滅して、多くの人びとは住むに家なき状態におかれた。帝国の崩壊と民主化という価値観に180度の転換が行われた。この社会の大変動は1853年ペリーの黒船来航にともなう明治維新と並んで、近代日本が経験した二つの大波であった。戦後の日本は、西欧諸国に追いつき追い越せというレースに再び挑戦した。教育制度にきびしい選抜制を導入し、優秀な人材を重点産業に投入し、はげしい競争倫理の下で営々と努力を積み重ねたのである。いわゆる日本株式会社の名の下、個人間の競争というより、各人は団体競争の一員として命を賭して働いてきたと言えよう。このような経過で1975年頃には一応西欧の水準に到達し、さらに石油ショックの試練を契機として、世界のトップレベルへと一大飛

躍を遂げたのである。実際ここ10年のわが国の台頭は人びとの認識をはるかに越えるものがある。

その結果として日本は、西欧諸国から最も不人気な国、時には世界経済を乱す諸悪の根源と見なされる仕末である。その上、経済の指標である円高レートはわが国の基幹産業の鉄鋼、石炭、造船を根底から揺さぶり、一方わが国の美德とされた勤儉貯蓄というライフスタイルは働きすぎと諸外国から非難され、三たび価値観の転換を迫られている。好むと好まざるにかかわらずわが国は国際化の荒波にさらされ、各人の意識改革が求められているのである。

大学人として受けとめねばならぬ重大なクレームは「Japan is a Science Eater」の一言ではなかろうか。今、我々がしなければならぬ仕事は、経済力の向上をはかることではなく、文化・科学の分野で世界に貢献することである。科学の基礎を西欧諸国から導入して技術だけを追及するという非難には、日本が21世紀に生残るための戦略としても答えねばならない。日本は世界の重要メンバーとして国際的自覚と責任を要求されているのである。

* 大阪大学レーザー核融合研究センター所長 (〒565 吹田市山田丘2-6)

* Institute of Laser Engineering, Osaka University (2-6, Yamadaoka Suita, Osaka 565)